

Title	認識論における知識と真理の地位
Author(s)	福田, 佑二
Citation	年報人間科学. 29-1 P.199-P.204
Issue Date	2008
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/3608">https://doi.org/10.18910/3608</a>
DOI	10.18910/3608
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 認識論における知識と真理の地位

**Matthias Steup and Ernest Sosa,  
Contemporary Debates in Epistemology.**

Blackwell Publishing, 2005

福田 佑二

### ■はじめに

本書は Blackwell 出版による Contemporary Debates in Philosophy シリーズの一冊である。本書は、近年の認識論における様々なトピックを、全三部、十一章に渡って展開する論文集である。第一部「知識と懐疑論」、第二部「基礎的知識」、第三部「正当性」のもとに、さらに関連的なトピックが配置され、それぞれが一つの章という態を成している。その各章に、異なる立場をとる二人の論者の論文を収録する、というのが本書の構成である。

ここでは、私自身の関心にしたがって、第十章(第三部に属する)「真理は第一の認識的目標であるか」を取り上げる。この章には、ジョナサン・クヴァンヴィッグ (Jonathan Kvanvig) による「真理は第一の認識的目標ではない」と、マリアン・デイヴィッド (Marian David) による「第一の認識的目標としての真理: 作業仮説として」が収録されている。

私がこのトピックを取り上げるのは、認識論のそもそもの営みを再考するためである。認識論は伝統的に、何らかの正しさ(一般的には知識)を目指すわれわれの認知活動を記述すること、あるいはわれわれが目指すべき正しい認知活動を見出すことに従事してきた。このとき、目標あるいは規範となるキー概念は、無批判的に真理であるとみなされてきた。あるいは少なくともそのような傾向が支配的であった。しかし、近年その真理の地位に様々な観点から疑いが

生じ始めている。とはいえ、その歴史的経緯も含めて、真理が認識論にとって無視できない概念であることには変わりがない。したがって、様々な認識的議論をより実りあるものとするためにも、その枢要な概念である真理の位置づけに自覚的である必要がある。その真理の位置づけについての議論が交わされているのが、この二つの論文である。

私を取り上げる二つの論文は、その題名が示すとおり、それぞれ真理を第一の認識的目標として認める立場と認めない立場から書かれている。しかし残念ながら、その議論は直接的にはかみ合っていない。というのは、クヴァンヴィッグが認識論そのものの範囲を検討する試みを論じているのに対し、デイヴィッドの議論は、認識論を知識の理論と前提したところで展開されているからである。したがって、本書においてデイヴィッドが前提としている立場を、クヴァンヴィッグが一方的に批判している、というのが本書のなかで成立している図式である。このような構図のゆえに、本稿は主に、クヴァンヴィッグの論文に即して展開されることを先に記しておく。

### ■知識と理論的な認識的成功のずれ

さて、今述べたように、デイヴィッドは認識論を知識の理論と捉えている。その根拠に関しては一切説明がない<sup>1)</sup>。それに対しクヴァンヴィッグは、認識論を純粋に理論的な認識的成功について探

求する分野と考える。まずこの、純粋に理論的な認識的成功、ということ、彼がどのようなことを意図しているのかをみてみよう。

まず、認識論がわれわれの認識的営みを探求する分野であることに異論はないと思われる。その上で、彼は特に、その認識的営みの成功的側面を探求するのが認識論の勤めと考える。たとえばその認識的成功には、真なる信念や知識のような、われわれが肯定的な価値を与える認識的な状態が含まれる。ただ、それら認識的成功のすべてが認識論の探求の対象となるわけではない。というのは、自然科学その他によってもこれら認識的成功は探求されるからである。したがって、認識論はそれらを哲学的に探求するものであるといわれる。では、哲学的に探求される認識的成功とは何なのか。それが、純粋に理論的な認識的成功である。「純粋に理論的な」というのは、それが実際の成功から抽象化されたものであることを表現している。したがって彼は、この成功を「認知の結果から抽象化された成功」(p.286)とも記している。

これは文字通り十分に抽象的な概念である。しかし彼は、これが具体的にどのようなものであるか、ということとを述べることを本論文の主旨とはしていない。本論文では、この理論的な認識的成功の、知識や真理との関連が消極的に述べられる。われわれはその議論を以下でみることになる。

さて、もし、クヴァンヴィッグのいうこの理論的な認識的成功が、まさに知識そのものを意味しているというのであれば、二人の立場

は対立しない（デイヴィッドは認識論を知識の探求とし、クヴァンヴィッグは理論的な認知的成功の探求としているのであった）。そこで次に、デイヴィッドの考える認識論、つまり知識の理論についてみてみよう。

クヴァンヴィッグの報告によると<sup>②</sup>、デイヴィッドは、知識の理論における唯一の認識的概念を正当性のみとする。それは次のような理由においてである。一般的に知識とは、（ゲティア問題に対処できる形で）正当化された真なる信念であるといわれる。したがって、知識という概念を説明しようとする場合、正当性、真理、信念という三つの概念が説明されねばならない。デイヴィッドはここで、このうちの二つ、真理と信念は認識論の外部に位置する概念であると主張する。

信念と真理は認識論にとって根本的なものであるにも関わらず、それら自身は認識的概念ではない。これらは、知識における非認識的構成要素である。このことは、認識論はこれらに責任を負わない、ということの意味する。つまり、認識論が問題にされる限り、信念と真理は所与であり、認識的概念を説明するために参照されえるものである<sup>③</sup>。

彼が、知識の理論において正当性のみを問題にするというのは、このゆえである（ただ、彼自身は信念や真理がどのような分野で問題とされる概念であるかについては触れていないようである。これ

についてクヴァンヴィッグは、真理は意味論的概念であり、信念は心理的概念と考えることができると述べている（p.288）。

以上より、デイヴィッドは認識論を、知識の説明に貢献する限りの正当性を探求する分野と考えている、といえる。したがって、このような正当性と、クヴァンヴィッグのいう理論的な認知的成功の関係がここでの問題となる。この問題に対するクヴァンヴィッグの評価は次のようなものである。

デイヴィッドの正当性の概念は、クヴァンヴィッグの考える認識論の枠内に収まらない。たとえばその正当性は、行為の理論によっても探求されえる（残念ながらそれが具体的にどのような議論になるのかは触れられていない）。したがって、知識の説明のみに貢献する正当性は存在せず、認識論がアイデンティティを主張する限り、知識のみをその対象とすべきではない。

以上より、クヴァンヴィッグの考える理論的な認知的成功は、知識の概念といくらかのずれを見せる。しかしそのずれは、正当性の解釈をめぐるものだけにとどまらない。

### ■真理を指さない認知的成功

既に述べたように、知識は真なる信念であることをその条件に含む。したがって、知識が何らかの意味で真理を目指すことは定義上必然なのであるが、デイヴィッドはそれ以上に、知識は第一の目標として真理を目指している、と主張している。しかし、クヴァンヴィッ

グは「一連の経験に意味を与える概念や、経験的に適切な理論を見出していること、というような、はっきりと真理に係しているとはいえない認知的成功も存在する」(P.294)、と述べ、認知的概念が必ずしも真理を目指しているとは限らないと考える。さらに彼は、もうひとつの例として、義務論的な、探求の責任性という概念を挙げる。これは、真理を目指すか否か以前に、そもそも目的論的でない認知的成功が存在しえることを述べたものである。

これら、真理との関わりがはっきりとは認められない認知的成功も、当然のことながら純粹に理論的な認知的成功に色を添えるわけであるから、真理という概念が、この理論的な認知的成功にとって第一義的な目標になるとはいいがたい。

以上より、知識の理論は正当性をめぐって認識論の範囲を越えてしまうし、また、知識の理論ではカバーしきれない認識論の領域がある。これがクヴァンヴィッグの結論である。デイヴィッドの考える認識論の範囲と、クヴァンヴィッグの考える認識論の範囲は、見事に半身ずれているのである。

### ■デイヴィッドの主張

しかしクヴァンヴィッグは、認識論における真理の役割に関して、デイヴィッドにいくらか歩み寄っている。まずデイヴィッドの議論を簡単に紹介しておこう。

デイヴィッドは、認識論における第一の認知的価値、すなわち目標とは何か、ということの問題にする。彼は、認識論を知識の理論として捉えるがゆえに、認識論が主題的に扱う目標も、知識に関連する目標でなければならないと考える。したがって、認知的と呼ばれるべき目標は、知識をもつという目標それ自体と、真なる信念をもつという目標、そして正当化された信念をもつという目標に絞られる(知識とは、正当化された真なる信念であることを思い出されたい)。彼が論じるのは、これら三つの主従関係である。

彼はまず、真なる信念目標と正当化された信念目標の優位関係を検討する。しかし、彼は結局のところ、これに関して決定的なことを述べない。ここでの彼の主張は次のようなものである。それは、正当化された信念は、真なる信念になる見込みが高いという事実であり、真なる信念の優位性をうかがい知ることができる、というものである。つまり、この事実から、われわれは真なる信念を求めるがゆえに、正当化された信念を求めている、という事実が垣間見られる、と考えるのである。

以上より彼は、真なる信念の方が正当性よりも目標として上位にある、ということを作業仮説とし、次に、真なる信念と知識の関係を検討する。

ところで、知識は真なる信念と正当性をその下位概念として含んでいるのであった。彼はこの点から、知識を求めることは、正当化された真なる信念を求める以上のものではないと主張する。すると、上記の作業仮説より、最終的に真なる信念が第一の認知的目標とな

るわけである。しかし、この主張に対してはゲテアによる反論が予想される。知識は、単に正当化された真なる信念ではない、という反論である。彼は、知識を非偶然的に真である信念と解釈することによって、この反論を回避する筋道を提示する。結局のところ、ゲテア問題を考慮したとしても、知識は真なる信念であることから逃れられないのである。とはいえここで、この問題についてこれ以上踏み込んだ議論は行われない。

以上より、ともかくも、真なる信念が第一の認識的目標であるという考えが擁護されるのである。

### ■クヴァンヴィッグの歩み寄り

しかしクヴァンヴィッグは、このような結論に対して次のような問題を提示する。

生物の実際的な認知活動は、単にその信念が真であるばかりでなく、さらに何らかの意図に適用ものであることを要求しているように思われる。つまり、われわれの認知活動は、真理以上の認知的成功（たとえばそれが知識であったり理解であったりするわけだが）を目指していると考えたほうがもっともらしい<sup>(4)</sup>。

ところが彼は、このような問題を指摘しつつも、様々な認知活動を真理に基づいて特徴づけることを次のような点で容認している。まず彼は次のようにいう。

私の観点によると、認知的活動に含まれている認知の根本的な機能、および根本的な意図的態度は、真理という概念に訴えることなく特徴づけることができる。この機能とは、どの主張pにおいても、pであるかどうか、たとえば、雨が降っているかどうか、特定の対象が捕食者であるかどうか、ということを決する機能である。しかしながら、このような特徴づけは、真理よりも強力な事実的概念に訴えることをしない。(p.293)

「真理よりも強力な事実的概念に訴えることをしない」というのは次のような根拠によるものである。たとえば、知識や理解というような概念をもたない子供や動物ですら、何らかの意図的な認知活動を行う。このことから、真理以上に強力な概念である（さらにいえばより実際的である）知識や理解といった概念は、認知活動にとって本質的なものではないといえる。とはいえこのことで、真理の基礎的性格が認められるわけではない。しかし、真理がそこで、何らかの重要な役割を占めていることは確かなのである。そういう点で、真理という概念は認知活動にとって中核的な概念であることは否定できない。このように考えるのである。

したがって、上で既に述べられた彼の結論にこの主張を加味すると、彼の結論は最終的に次のようになる。すなわち、真理は認識論の第一の目標ではないが、「重要かつ中心的な認識的価値であり目標である」(p.295)



## ■最後に

議論の構成上われわれは、認識論の再考という観点に関しては、クヴァンヴィッグの主張に積極的な意義を見出すしかない。

さて、彼の主張の根拠を形作っているのは、認識論を、純粹に理論的な認知的成功を探求する分野とする、というテーゼである。このテーゼ自身の評価は、認識論の再考というトピックで今日論じられている諸問題と、このテーゼの関係を診断することによって得られる。この観点から見た場合、今回の彼の論文の積極的な意義は、このテーゼと知識の理論の距離感を示したことにある。もちろん、知識の理論を認識論の中心からずらしたということだけから、これを認識論の再考として歓迎するわけにはいかない。重要なのは、知識の理論を認識論の中心からずらすこのテーゼが、その他の問題にどのような態度を示すかである。

クヴァンヴィッグはここで、認識的目標としての地位から真理を追い落とすわけだが、このような態度は、ステイチ流の認識的プラグマティズムとの親和性を示しているように思われる。ただし彼は、プラグマティックであるということに、真理を滑り込ませる余地を残している。つまり、有用性という面からいって、真理は直接的な目標とはならないかもしれないが、それでも何らかの有用性の核がそこに潜んでいると考えられている。

これとは別に、われわれの認知活動はそもそも真理が問えるよう

な命題的な形態をとっているとは限らない、という疑念も存在する。これに対してクヴァンヴィッグは、彼のいう理論的な認知的成功が命題的であると述べていない。とはいえ彼は、真理の中核性を否定しないわけである。だがこのことから、端的に彼の考える認知活動が命題的であるとは結論できない。私の印象としては、彼は命題的態度への疑念も引き受けた上で、理論的な認知的成功の概念を想定しているように思われる。

このように、クヴァンヴィッグの立場は今日のより一般化された認識論を考える上での係留点としても、興味深い役割を果たすと思われる。

## 注

- (1) 「認識論は知識の理論である」(p.301)、これがこの点に関するデイヴィッドの唯一の言及である。ただ、彼の論文の主旨からして、このことを致命的な落ち度と決め付けることはできない。
- (2) クヴァンヴィッグがその議論のために参照しているデイヴィッドの立場である。典拠は、David, M. (2001) *Truth as the epistemic goal*. In M. Stempel(ed.), *Knowledge, Truth, and Duty: Essays on Epistemic Justification, Truth, and Responsibility*. Oxford: Oxford University Press.
- (3) *Ibid.* ただし、クヴァンヴィッグの論文(p.288)からの孫引き。
- (4) 紙面の都合上詳しく紹介できないが、デイヴィッドは「リアルな欲求」という概念を導入することで、このような批判に応答する方途を示している。(pp.308-310 参照)